博士論文の要約

氏　　名：WU WUYUNGA

論文題目：ラクダ牧畜の維持に関わる民族誌的研究
—中国内モンゴル自治区アラシャー盟の事例から—

要約

本論文は、中国内モンゴル自治区アラシャー盟におけるラクダ牧畜民を対象に、まず彼らがもつ牧畜技術を民族誌的に記述し、ラクダと人が長期にわたって関係を維持できる構造を明らかにする。そのうえで、ラクダ牧畜に関わる新たな見解を人類学的な牧畜研究に提示するものである。具体的には、ラクダが本来もつ生存能力を活かした牧畜システムの構造を明らかにしたうえで、その牧畜システムがラクダへの十分な介入を前提に維持されていることを示す。このことで、従来の牧畜研究でみられた支配する人間と支配される家畜という二元論を乗り越えるとともに、動物の主体性や自律性を強調する脱人間中心主義的な研究に新たな事例と見解を提示するものである。

近年、動物と人とのかかわりに関する人類学的な研究では、家畜動物に対する人間の優越性を否定し、動物の自律性や能動性、人間との相互作用に強い関心が寄せられている。こうしたなか、両者がどのような関係を構築し、その関係がいかに維持されているのかを丹念に記述する必要性が指摘されている。ことに、モンゴル高原においてフタコブラクダを利用した牧畜活動に関しては、個別の牧畜技術に関わる記録はあるものの、牧畜民によるラクダへの一連の技術が牧畜活動の維持にどのような役割を果たしているのか、両者がいかに関係を維持しているのかといった問いを飼い主の介入やラクダの自律性といった観点から分析した研究はない。

そこで本論文では牧畜に関わる人類学的な研究の空白を埋めるため、まずは牧畜民たちによる一連の牧畜技術を民族誌的に記述し、そのうえでラクダと人間が長期にわたって関係を維持できる構造を明らかにする。

このような目的をもつ本論文は、つぎのような構成で論を進めた。まず序章では、本論文の背景と目的を示し、先行研究を整理することで本論文の視座を提示するとともに、調査方法と調査内容をまとめた。

第１章では、調査地である内モンゴル自治区アラシャー盟の概要、フタコブラクダの生態や分布といった基本状況を紹介し、本論文においてアラシャー左旗のＵ家、右旗のＳ家を調査対象とした理由と両世帯の概要を述べた。そして、第２章ではラクダの成長過程を整理し、性別・年齢による牧畜民たちの働きかけと認識体系を示した。そのうえで、牧畜民の年間の生業暦を記述した。

つづく第３章から第５章までが牧畜技術の民族誌的な記述となる。まず第３章では、雌ラクダの交尾から妊娠、出産、育児、そして仔ラクダの離乳に至る過程を取りあげ、各段階における牧畜民の働きかけを記述したうえで、ラクダの母子関係への介入がラクダ牧畜の維持にどのような意義をもつのかを明らかにした。第４章では、２歳に達したラクダに

対しておこなわれる鼻木つけと調教という二つの技術を明らかにしながら、それらの技術が牧畜の維持に果たす役割について検討した。第 5 章では、3 歳以降の雄ラクダに対しておこなわれる去勢と種雄の選抜に着目し、それらの技術や知識を記述したうえで、去勢と種雄の選抜が牧畜の現場で続けられている理由について検討した。

第 6 章では、ラクダに対する牧畜民たちの介入技術を振り返りつつ、ラクダへの認識も考慮しながら一連の技術や態度が牧畜活動の維持という目的においてどのような役割を果たしているのか、牧畜民とラクダはいかに持続的な関係を築いているのかについて考察した。そのうえでラクダ牧畜に関わる新たな知見を人類学的な牧畜研究のなかに位置づけた。

以上の構成をもつ本論文では、ラクダ牧畜の維持に関して以下の二つの点を新たに明らかにした。

第一は、ラクダの成長段階に応じた一連の介入技術とその意義を解明したことである。牧畜民たちはラクダの一生を、幼年期、青年期、成熟期、老年期の 4 つの段階に分け、出産後における母子関係への介入から、鼻木つけ、調教、去勢、種雄の選抜に至るまでラクダの成長段階に応じた働きかけを続けている。本論文ではこれら一連の技術がもつ意義を明確にした。

たとえば、母子関係への介入は、繁殖管理や安全な出産という目的にとどまらず、仔ラクダを若齢のうちに人間に慣れさせ、かつ宿営地をホームレンジとして認識させることで将来的にラクダ牧畜を維持するための基盤を形成する意味があった。2 歳の仔ラクダに実施される鼻木つけは、ラクダの行動制御にくわえ、牧畜民が鼻木をつけたラクダを「一人前」として認識する契機となっていた。つづく調教では、個々のラクダの性格を把握し、騎乗利用の可否や群れの編成、種雄の選定といった判断の根拠となっていた。

また、3 歳から 5 歳の雄ラクダに対する去勢は、たんに生殖機能を喪失させる行為だけでなく、術後の儀礼を通じて人間がラクダを自然から「借り受ける」という意識も形づくっていた。種雄に対しては騎乗などの日常利用を避け、ほかのラクダ以上に敬う心情が確認された。そして、このような特別な意識や心情もラクダ牧畜を維持することにとって重要な動機になっていると指摘した。

第二は、ラクダ牧畜が維持される構造を明らかにしたことである。本論文の第 3 章から第 5 章の成果を踏まえ、牧畜の維持に不可欠な要素を、(1) 技術的な介入、(2) ラクダに対する認識と態度、(3) ラクダの自律性への信頼、という三点から考察した。

一つ目の技術的な介入に関して、牧畜民たちは仔ラクダが誕生する前後の段階から母ラクダの出産場所に注意を払い、出産後には介入の強度を強めていた。とくに、牧畜民たちは誕生後の仔ラクダを必ず宿営地近くで育て、身体的な接触を繰り返す。このことで飼い主を忌避せず、かつ宿営地をホームレンジとして認識する個体をつくる。仮にこの働きかけを怠ると仔ラクダが「ドグシン（野生的)」になるからである。ラクダが野性的になると将来的に人間の存在を忌避し、搾乳や騎乗利用も困難になる。本論文ではこのような幼年期における介入はラクダが人間とともに生きるための基盤を築く技術であると指摘した。

二つ目のラクダに対する認識や態度に関して、牧畜民たちはラクダの一生を成長段階に応じて分類し､各段階のラクダに対して特別な意味付けにもとづく働きかけを続けていた。

例えば、彼らは鼻木つけ作業をラクダの「成人式」と捉えたり、雄ラクダへの去勢を「自然へ奉納」と解釈したりする。また、種雄を「神」とみなし、雌ラクダを「火の神」と捉

えてさまざまな儀礼や祭祀を執り行っている。ラクダ牧畜は牧畜民たちが介入の技術をもっているだけで維持されるものではない。

そこにはラクダに介入する人間側の認識や態度、動機も必要になってくる。本論文では、アラシャー盟の牧畜民たちがラクダの成長段階に応じて特別な認識や象徴的な意味を付与することもラクダとの関係を維持していくうえで重要であると指摘した。

三つ目のラクダの自律性への信頼に関して、牧畜民たちはラクダがもつ空間認識力や移動能力、記憶力を信頼し、それに委ねる放牧方法を続けていた。これは、厳しい自然環境のなかラクダがもつ能力に委ねたほうが広範囲の牧草地において豊富な栄養を得ることができるからである。本論文では、ラクダの自律性への信頼が極乾燥地という飼育環境において無理なく効率的に牧畜を維持するための重要な態度であると指摘した。

以上がラクダ牧畜の民族誌的な記述を通して明らかにした点である。このような成果をもつ本論文には以下のような学術的な意義がある。

第一は、民族誌的な貢献である。従来のラクダ牧畜研究はその多くがヒトコブラクダに焦点を当てたものである。フタコブラクダを対象とし、その牧畜技術を民族誌的に記録した研究は極めて少ない。こうしたなか、本論文では 76 頭のラクダを対象に、生命誌というアプローチからそれぞれの成長段階における牧畜民の介入や認識を記録した。そのうえで、母子関係への介入、鼻木つけと調教、去勢と種雄の選抜というラクダ牧畜を維持するうえで基盤となる技術の実態を明らかにした。このように本論文はラクダの生命誌という独自の方法論によるラクダ牧畜の民族誌的研究として新規性がある。さらに、本論文で採用した生命誌というアプローチはほかの家畜研究にも応用可能である。本論文は汎用性のある方法論を提示した点でも独自性がある。

第二は、牧畜民による介入とラクダの自律性との関係を新たに指摘した点である。本論文は、ステパノフとマルキナが示した「家畜の自律性」という概念を踏まえながら、ラクダの自律性が牧畜の現場で活かされる条件を実証的に解き明かした。ステパノフとマルキナによると、自律性をもつ家畜動物は人間による介入が希薄な状況でも人間との間で長期的な関係を構築できるという。しかし、一連の牧畜活動においてその自律性がいかなる条件下で活かされるのかは十分に分かっていなかった。本論文では、牧畜の現場でラクダの自律性が活かせるのは幼年期や青年期における十分な介入が前提となっていることを初めて明らかにした。これは、動物の自律性を過度に強調する脱人間中心主義的な研究動向に新たな事例を提示するものである。

そして最後に、本論文では今後の研究課題として、（１）いまでもラクダ牧畜が続けられている他地域との比較、（２）ほかの大型家畜との比較、（３）ラクダ牧畜の維持に関わる社会・経済的な要因への注目、という三つを示した。